

# 身に付けた力を活用できる児童の育成

研究機関 鳴門教育大学 大学院学校教育研究科 高度学校教育実践専攻  
教職実践力高度化コース 指導教官 前田 洋一  
南国市立大篠小学校 教諭 山崎 京子

## 1 はじめに

### (1) 課題設定の経緯

本校は平成 22 年度より高知県教育委員会教育拠点校事業を受け、算数科で実践研究を行ってきた。さらに平成 27 年度からは算数専科教員（研究主任兼任）の加配を 5 年生に配置し、さらなる研究を行っている。このような研究の結果、全国学力・学習状況調査においては平成 25 年度以降、算数 A・B、国語 A・B とともに全国平均・高知県平均を超える結果となっている。

しかし、設問別に分析すると、「グラフを基に、わかったことを的確に書くこと」「目的や意図に応じて、グラフを基に自分の考えを書くこと」など、算数科で日常的に行っていることが、国語 B において正答率が低いことがわかった。そこで、本実習では、教科で学んだ力を他教科で活用できるようにするという点に焦点をあてて実践研究をすることにした。

### (2) 実態把握

ア 実施対象：6 年生 143 名 担任 4 名

イ 全国学力・学習状況調査の分析

本校のこれまでの全国学力・学習状況調査（H25 ～29 年度）国語 A・B において、正答率が全国平均か県平均より低いもの、または正答率が 50% 以下のものについて調べた結果以下のような課題がみられた。

- ・目的や意図に応じて～
- ・書く（関係づけながら～、整理して～、違いを捉えて～、比べて～）

ウ 担任への聞き取り

5 月の時点での、児童の良さと課題について対象学年の担任 4 名に聞き取り調査を行った。そこで出された意見は以下のようなものである。

- ・学力が低い。
- ・作文が苦手。
- ・初発の理解が弱い。
- ・要旨や要約に課題がある。
- ・語彙が少ない。言葉を知らない。
- ・「いろいろ」を多用し、スピーチも一文で終わってしまう。
- ・具体的な表現がない。
- ・音読でよくつまる。読み間違いが多い。
- ・勉強の仕方が分かっていない。

担任が児童に感じる課題の多くは国語にかかわる内容であるとともに、どの教科でも必要な基礎学力であるともいえるものであった。

エ 児童へのアンケート（記名式）

全国学力・学習状況調査の分析からは「書く」こと、担任への聞き取りからは、国語にかかわることに課題があることがわかった。そこで、本校の 5 年間の課題である「書く」ということを、児童はどのように捉えているのか、アンケート（記名式）を取ることにした。

(ア) 作文・日記

担任からも指摘のあった「日記・作文」についてまとめると、「作文・日記を書くことは好きか」という質問には、37%の児童が「嫌い・苦手」と答えていた。嫌いな理由として多く挙げられていたのは「書くのが苦手、文章を考えるのが苦手」「難しい」であり、出来れば書きたくないというものであった。学年の児童数の約4割が苦手意識を持っているということがわかった。

(イ) ノート

児童にとって日常的に「書く」作業であるノートについても分析していく。

まず「2. 学習中にノートをきちんと書いているか」という質問を、理由と共に分析すると、99%の児童はノートを書いていることがわかった。

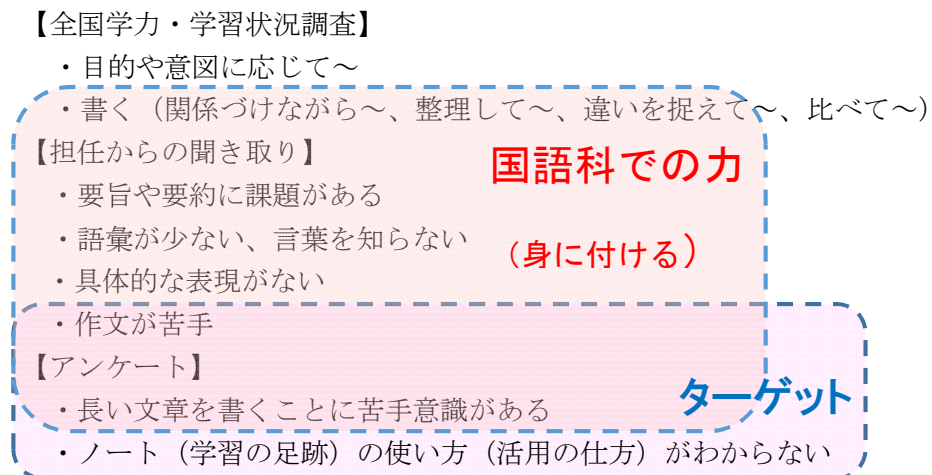
さらに、「3. ノートは何のために書くのか（複数回答）」という児童の回答を見てみると、表現の仕方は様々であるが、ほぼ100%の児童が「学習のため」に書いており、「学習に必要なもの」と考えてノートを書いていた。

しかし実際には、全員がそのノートを授業後、学習に使っているわけではなく、「ノートを見返すことはありますか」という質問の回答は「見返す 77%」「見返さない 23%」という2つに分かれた。さらに、このアンケート結果(記名式)を参与観察も含めて分析すると、「見返すことがない」児童は2つのグループに分けることができた。「学力が高い」児童と「学習に支援を要する」児童である。特に「見返すことがない」児童のうち、学習に支援を要する児童は、「ノートを書くことは、必要または大切だとわかっているし、習慣（書かなければならないもの）なので書いているが、学習の足跡としてのノートの使い方（活用の仕方）が分からない」ということがわかった。さらに、この児童は作文を書くことが「嫌い・苦手 37%」「自主学习で困ることがある 27%」にも含まれていることもわかった。

2 研究の目的

(1) 課題

3つの実態把握から課題を整理すると以下のようにまとめられる。



「身に付けた力を活用できる児童の育成」を目指してどこからアプローチするかを考えたとき、まず、国語科の力を身に付けさせることから始める必要性を感じた。そして、国語科で身に付けた力を他教科でも活用できるように発展させていこうと考えた。

特に、アンケートでわかった「ノートを見返しても分からない（ノートの使い方がわから

ない)、作文や日記を書くのが「嫌い・苦手」と答えた児童に、ノートを含めた「書く」力を身に付けることを1学期のねらいとすることにした。

(2) 授業実践に向けて

国語科で身に付けていく力を考えた時、「話す・聞く」「書く」「読む」は相互に関連しながら身に付けていく力である。(図1)しかし、今回は、表現手段としてことばを獲得し、使えるようになった後に、書きことばとして使用できるようになっていくと捉えた。(図2)。そこで、まず「話す・聞く」の力を身に付け、次に「書く」という領域に進んでいこうと考えた。

1学期はまず国語科でのことばの獲得を目指し、「意見と理由のつながりを聞き取ろう(話す・聞く)」(東京書籍6年生上)の単元で「話す・聞く」の力を身に付け、次の「新聞の投書を読み比べよう(読む・書く)」(東京書籍6年生上)の単元で「書く」力につなげていこうと考えた。

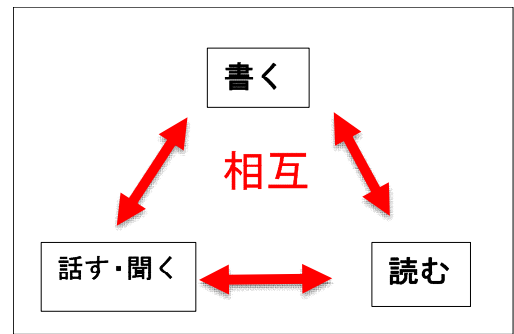


図1 「話す・聞く」「書く」「読む」の関係図

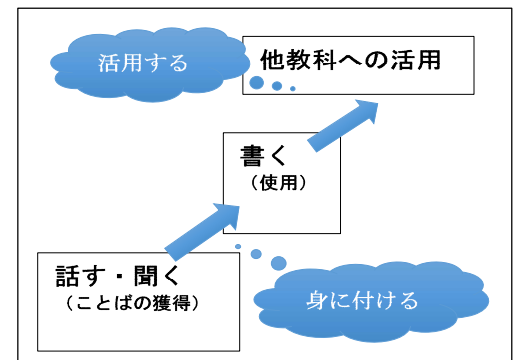


図2 獲得したことばを他教科へ活用させる道筋

3 研究内容

(1) 実践①(身に付ける)

ア 授業実践①(話す・聞く)「意見と理由とのつながりを聞き取ろう」

この単元では、まず「話す・聞く」の力を身に付けていくことを目指した。

- ①それぞれの「意見(立場)」と「理由(根拠)」を聞き取る
- ②意見と理由のつながりが適切か判断する
- ③適切かどうかの判断をきちんと伝えることができる

学習では、まず全員で確認しながら、教科書の人物の「意見(賛成・反対)」と「理由」を聞き取り、教科書で確認し、意見と理由が適切かどうかを判断していった。学習中は児童から出た「説得力」「納得」「矛盾」をキーワードとして使いながら展開していった。特に、意見と理由のつながりに「矛盾がないか」「説得力のある理由か」「話題(テーマ)からズレていないか」という視点で判断していくことを大切に行った。

自分の意見を発表する際にも「意見(説得力がある、説得力がない等)」と「理由(なぜそう考えたのか)」という、教科書の内容を使っていった。実際に使うことで、児童はその便利さやわかりやすさを体験するとともに、人物の理由が妥当かどうかをより判断しやすくなった。

人物それぞれが挙げている理由は「経験・体験」や「想像」である。児童はそれらを、「理由としては『強い(説得力がある・納得できる)』、『弱い(説得力に欠ける・納得しにくい)』」という言葉を使いながら判断していた。また、授業の中で、学級会や委員会の話し合いの場面を例に出し、活用を意識付けるようにした。

学習後は、教科書の音声教材(CD)についている話し合いの様子を適用問題として取り上げた。授業で確認した視点をもとに、誰の意見が一番説得力があるか、ということを各自で判断させた後、班で教科書の人物の「意見」「理由」、それに対する「自分の判断(意見と理由が適切・不適切)」を交流した。児童は、これまでの学習をいかして「なぜか」と「～でしょうか」などの表現に注目し、文中の表現を根拠としながら、自分の判断(意見)

を交流することが出来ていた。さらに、「なにを理由（根拠）に挙げるか（経験、想像、インタビュー）」によって、説得力が変わってくるということを感じ取っていた。

イ 授業実践②（書く）「新聞の投書を読み比べよう」

この単元では、前単元で学んだ「話す・聞く」の学習をいかして、資料から「意見と理由」を読み取り、その読み取ったことを使いながら「書く」力を身に付けていくことを目指していった。この単元で身に付けたい力は

- ①「意見と理由」に「根拠」を付け足すことで説得力が増すことがわかる
- ②「文章構成」がわかる
- ③学習中のワークシートやノートを使って、（一人で）投書を書くことができる

とした。「投書を書く」というのが最終到達目標であるが、実態把握のアンケート調査にあったように「書く」ことへの苦手意識や課題が多い。そこで、そのような苦手意識の強い児童が、スムーズに「書く」という活動に取り組むことが出来るための手立てとして、文章構成を視覚的に捉えられるようにしようと考えた。

【手立て①】 読み比べる資料を一枚に並べる。

4つの資料（投書）を1枚に並べることで、読み比べやすくした。資料を一度に見ることができるので比較がしやすく、意見と理由が書かれている段落に気付きやすい。

【手立て②】 色分けを行う。（資料・ワークシート）

「意見…青」「理由…赤」と、色分けしてラインを引くことで、文章全体の中での位置や順番が捉えやすくなる。

この2つの手立てによって、全体の段落数、意見や理由、根拠の文章全体の中での位置など、共通点に気付きやすくなり、文章構成を視覚的に捉えられるようになった。作業の中で「意見」や「理由」を見つける時にも、手立て①によって、1つの投書に線を引くたびに他の投書のどこに書かれているかという見当をつけやすくなり、支援が必要な児童が一人で活動する時間も増えた。また、「意見」と「理由」以外の部分に何が書かれているかということにも着目しやすくなり、共通点や相違点に気が付く手立てとなった。（図3）

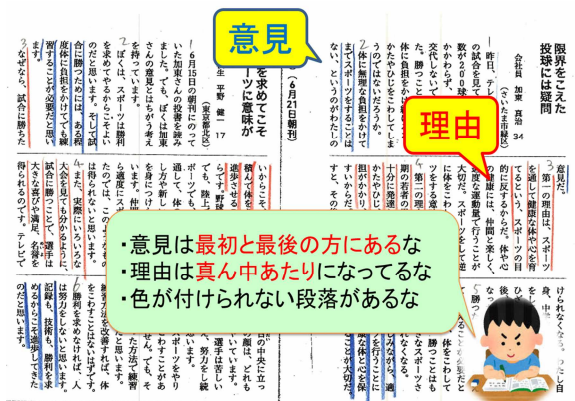


図3 色分けの例

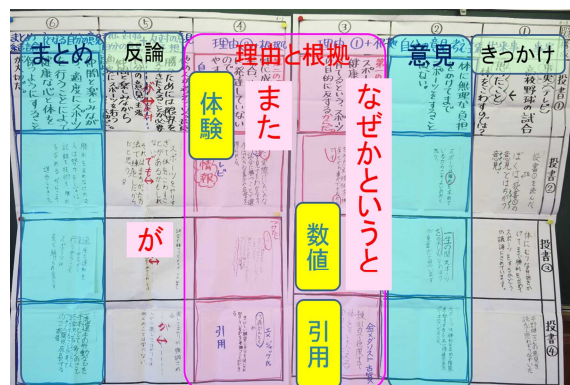


写真1 ワークシート

ワークシート（写真1）は、段落の内容を要約して記入した。要約は担任への聞き取りでも課題として出されていたこともあり、主語・述語の関係など、要約のポイントを再確認しながら行っていた。

意見か理由かという判断をする際には、接続詞や文末に着目した。その着目した言葉を資料の中でしるしを付けたり、ワークシートに書き込んだりしておくことで、「書く」作業の手掛かりにできるようにし、最終的には完成したワークシートを見れば、自力で投書を書くことができることを目指した。



実際に投書を書く際には、簡単な構成メモを作り班で意見交流した。その際も、児童はこれまでの学習を活かして、「その理由は説得力が弱くない?」「例えば、こういうことを書いたほうが、説得力があるんじゃない?」というアドバイスを行うことが出来ていた。

その後、原稿用紙に投書を書き始めた時も、書き込みをした資料やワークシートを手掛かりにして書き進める児童が多かった。ここでは、樺山(2016)を参考に400~600字程度で書く、という字数を提示した。児童は「え〜、そんなに書けるかな」と、最初は心配していたが、書き始めると集中して600字程度で書き上げることができた。

#### 4 実践② (活用する)

##### (1) 校内研修

夏休みに、目指す子ども像の具体化を図る校内研修が行われた。私が参加した6年生では「(自分に)自信がない」ことが根本課題ではないかという結論に至った。そこで、目指す児童像を「自分の意見を出し、課題に取り組める」として、2学期の具体的な取り組み内容を考えていった。その中で、目指す児童像の「自分の意見を出し」という部分には、「自己決定」が大きく関わるとして、授業の中で「自己決定」の場面をつくり、自分の意見(立場)をきちんと伝えられることに重点をおいて取り組もうということになった。

1学期の取り組みで、話し合いの基礎になる「意見と理由」「根拠」を話すことを行っていたわけだが、このような課題が出るということは、児童がまだ十分に「身に付け」ていないといえる。そこで、1学期に取り組んできた国語科の「話す・聞く」「書く」の内容を話型として整理・視覚化し、実際に生活の中で使って(活用して)いくことで、2学期はしっかりと話し合いの力を「身に付け」「活用できる」ことを目指していくことにした。

##### (2) 話型の提案と他教科での活用(日常化)

まず、各担任からの「話し合いを充実させるためには、話型が欲しい(あった方がいい)」「できれば、常時掲示とカード形式のものが欲しい」という希望をもとに、話し合いの基礎となる話型をつくった。もともと、本校研究部には「話し合いのコツ」として低学年・中学年・高学年と系統立てられた「話し方・聞き方」があるが、認知度が低く活用されていなかった。そこで、写真2の整理された国語科の授業で学習した「意見・理由・根拠」を合わせて整理し、話型をつくった。常時掲示用と、カード型の2つを準備し、児童に提示することとした(写真2、写真3)。ここでも、国語科の学習と同じ色分けを使うことで、話すときの順番を視覚的にも意識できるようにした。カード型は、担任が条件や話型を指定する際に活用していった。

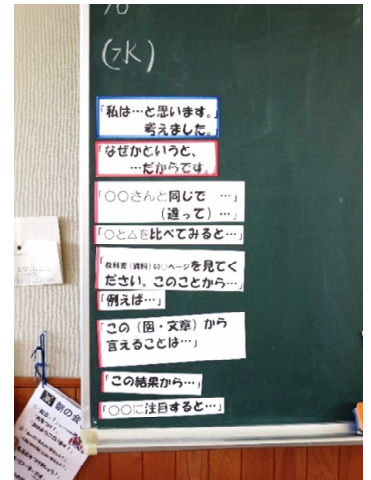
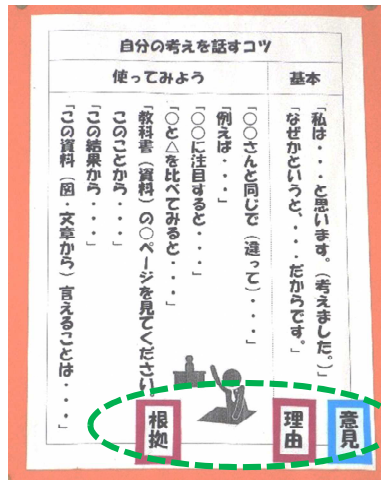


写真3 カード型

活用は、算数の時間を中心に行ったが、担任からは国語科の「資料を生かして呼びかけよう」でかなり活用できたという意見をもらった。支援を要する児童には、カードを指定すると構文ができるため指導にも役立ち、児童もそれを受

活用は、算数の時間を中心に行ったが、担任からは国語科の「資料を生かして呼びかけよう」でかなり活用できたという意見をもらった。支援を要する児童には、カードを指定すると構文ができるため指導にも役立ち、児童もそれを受



けて抵抗なく書き進めることができたということであった。また、社会科は資料が多いため、発表や話し合いの際には、「根拠」の部分の言い方を活用する児童が多かったという報告を受けた。

## 5 まとめ

### (1) 成果と課題

教科で「身に付ける力」を「①意見・理由・根拠を使って分かりやすく「話す・聞く」「②書く」とし、他で「活用する力」を「③話型」を使って身に付けていくと考えると（図4）、児童と担任のアンケート調査からは以下のような成果と課題が読み取れた。

国語科で身に付けた「意見・理由・根拠」を使って、「話す・聞く」「書く」力は、児童も担任も「身に付ける」ことができたと感じている。また、その

力を「話型」として他教科や日常の中でも活用できるようになってきている、ということもアンケート結果からわかる。さらに、授業実践で、ワークシートを参考に投書を書いたことをきっかけとして、その後の授業では、教科内でノートを見返したり参考にしたりする児童も増えた。このことから、児童は学習で使ったもの（ワークシート、文章構成など）についても、どこでどのように使えばよいか、がわかってきたといえるのではないだろうか。



写真4 授業での活用例

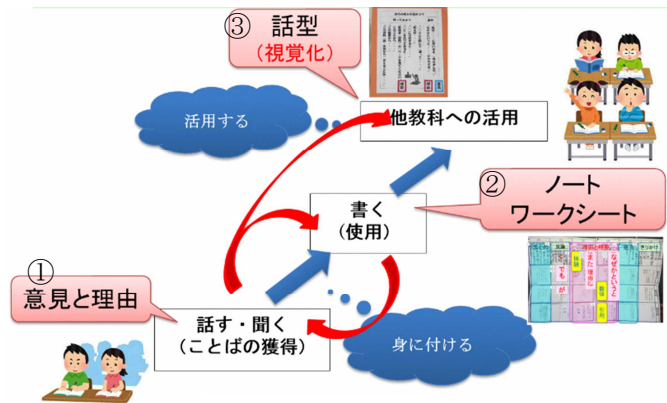
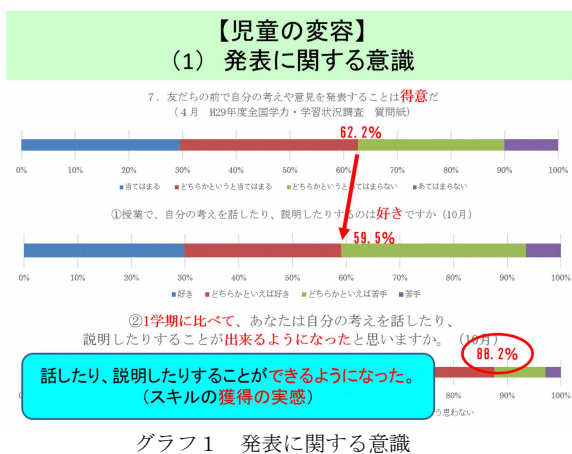
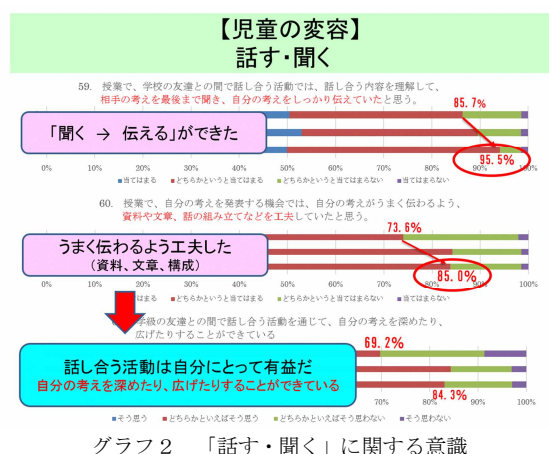


図4 実習の流れ



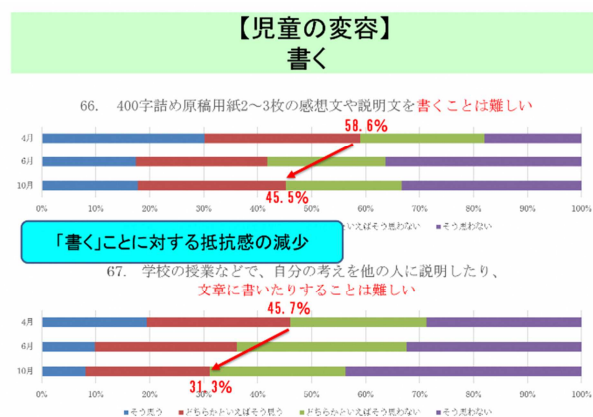
グラフ1 発表に関する意識



グラフ2 「話す・聞く」に関する意識

成果があった一方で、課題も残った。実習では、「話す・聞く」「書く」の2つを往還しながら、「活用」に発展していくことを目指して取り組みを行っていった（図4）。しかし、「話す・聞く」と「書く」を比較すると、「話型」を使いながら繰り返し指導することができた「話す・聞く」は、肯定的評価が80%以上に達しているが（グラフ2）、「書く」については、「話す・聞く」ほど向上は見られず、まだ30~40%の児童が「(長い文章を)書くことは難しい」と感じていることから（グラフ3）、今後も継続した指導が必要といえる。

実習中の研究授業でも、外部講師の方から「どの児童も発表は素晴らしかったが、ノートは十分に整理されているとはいえず、発表



の力との差を感じた」との指摘があった。「話す・聞く」については、外部からの評価を得られる程度に「身に付け」「活用」できているといえるが、「書く」ことについては、まだまだ指導が必要な段階であることが、さらに明らかになった。

## (2) 今後の取り組み

国語科での学習内容を「話型」という「見える形（視覚化）」にしたことで、「話す・聞く」力を「身に付け」「活用する」については成果が見られた。しかし、<sup>3</sup>「書く」に関する意識<sup>3</sup>が述べたように「書く」ことについては課題が残った。「書く」力をさらに確かなものとして「身に付け」「活用する」ことができるようにしていくためには、担任のアンケートにあったように「教師の働きかけ（定着までの指導）」が重要であろう。

今回、「書く」力に十分な定着が見られなかった原因は、私を含めた担任からの「提示」と「評価」が十分ではなかったためと考える。

児童アンケートの回答で「話型」を「学習や生活の中で使わなかった 27.5%」と答えた児童のうち、「どれを使っていいのかわからなかった」「使い方がわからなかった」という理由を述べた児童には、今回の取り組みが十分理解されていなかったということである。これらの児童には、今回以上の手立てとして、さらに個別に、または具体的に「使う場面・使い方（提示）」「価値づけ（評価）」を行っていくことが必要である。

さらに、学んだことを国語科以外で「使う場」を計画的に取り入れていくことで、児童が「できた」「できるようになった」「やってよかった」と実感するような「価値づけ（評価）」を行っていかなければならない。このように「場の提供」と「評価」を繰り返していくことで、主体的に学び、活用できる児童を育てていきたい。

## <参考・引用文献>

- ・ 岡本夏木（2005）『幼児期—子どもは世界をどうつかむか—』岩波新書
- ・ 樺山敏郎（2016）「学びの文脈を創る国語科授業の推進—活用力を高めるメタ認知の重視〔小学校・国語〕—」『新教育課程ライブラリ Vol.10』ぎょうせい
- ・ 桂聖（2017）「授業UDの考え方・進め方」『授業のユニバーサルデザイン Vol. 9』pp.10—13.桂聖・石塚謙二・廣瀬由美子・日本授業UD学会 著書 東洋館出版
- ・ 小貫悟・桂聖（2014）『授業のユニバーサルデザイン入門 どの子どもも楽しくなる「わかる・できる」授業のつくりかた』東洋館
- ・ 岡本夏木（1982）『子どもとことば』岩波新書
- ・ 斉藤孝（2016）『語彙力こそが教養である』角川新書
- ・ 『学びのカリキュラム・マネジメント—子どもの書く力が飛躍的に伸びる！—』（2016）
- ・ 渡辺通子（2017）「国語教育 コミュニケーション」『実践国語研究 2017年6/7月号 No.343』pp.66 明治図書
- ・ パティエー・リー著 石隈利紀 監訳 中田正敏 訳（2015）『教師のチームワークを成功させる6つの技法』誠信書房